

(様式 3-1)

平成 29 年度 プロジェクト研究費研究実績報告書

平成 30 年 5 月 9 日

代表者 石田 有理

研究課題名	家庭と保育現場における幼児期の非認知能力の育成
研究期間	平成 29 年 4 月 1 日 ~ 平成 30 年 3 月 30 日
共同研究者	大宮明子
1. 今年度の研究概要	
<p>現在、幼児を取り巻く環境は、核家族化、家庭以外の保育や教育の場の増加などにより急激に変化しているといえる。都市化や地域のつながりの希薄化などにより、家庭の孤立化、家庭の教育力低下が指摘されている一方で、近年、幼児期における教育がその後の生涯にわたる発達に影響を与えることが大きく注目されている (e.g., Heckman, 2006)。特に、幼児期における意欲や我慢強さなどの非認知能力がその後の発達が重要であることが示されている。しかし、日本では、幼児期の教育的介入プログラムやその効果に関する研究はほぼなく、何が非認知能力の発達に資するかについての検討は不十分であるといえる。また、我慢強さなどは集団生活での経験を通じて獲得される側面もあると考えられ、家庭だけでなく幼稚園や保育園での取り組み、家庭と保育現場との連携が必要であると考えられる。そこで、本研究では、幼児期における非認知能力の育成のために資するものはなにかについて検討することを目的とした。</p> <p>今年度は、特に、家庭と保育現場という子どもを取り巻く重要な環境を取り上げ、H27 年度に行った親への調査のデータと H28 年度に行った保育者への調査のデータをあわせて再度分析を行った。この分析を通じて、幼児期の非認知能力を育成するために親と保育者が具体的にどのような取り組みを行っているのかについて検討を行った。また、親と保育者の取り組みを比較し、家庭と保育現場との違いをふまえた連携のあり方に関する示唆を得ることを目的とした。</p> <p>また、これらの分析結果をふまえ、家庭における親子のやり取りを観察し、そこから幼児期の非認知能力を育成するための親の働きかけや親子のやり取りがどのようなものなのかを考察することを目的に、観察研究に着手した。</p>	
2. 研究の成果	
<p>H27 年度に保護者に対して行った調査と H28 年度に保育者に対して行った調査とを合わせて分析することによって、保護者と保育者が非認知能力の中でも具体的にどのような側面の能力を就学前までに身につけておいてほしいと考えているのかについて検討を行った。その結果、保護者と保育者では重視している側面が異なる部分があり、保護者がより重視している側面、保育者がより重視している側面があることが明らかになった。「わからないことについて、なぜ、どうして、と周りの人に聞くことができる」という項目は、保育者よりも保護者の方が身につけるための意識的な取り組みを行っていた。一方、「多少嫌なことがあっても、うまく気分を変えることができる」「時間を見通して行動できる」という項目は、保護者よりも保育者の方が意識的な取り組みを行っていた。特に時間を意識したり気分のコントロールをしたりといった集団生活に必要なスキルについて、保育者の方がより意識していることが示唆される。この結果については、教育心理学会でポスター発表を行った (ポスター添付あり)。</p> <p>また、前述の調査データについて、具体的にどのような取り組みを行っているのかに関して着目した分析も行った。その結果、「自分の気持ちをことばで伝えることができる」などの自己制御に関する項目に関しては、保護者も保育者も言うように促す、気持ちを代弁するなどの取り組みを主に行っていた。また、保護者は兄弟とのかかわりや他の子どもとのかかわりの機会をもつようにするという回答が多かった。「いろいろな友達と仲良く遊べる」といった人間関係にかかわる項目に</p>	

については、保育者はあそびのルールを守るように促したり、みんなで遊べるあそびを提案したりすることが多いのに対して、保護者は他の子どもと遊ぶ機会をもつようにしていることが多かった。「興味をもったことを、自分なりの方法で確かめる」「あそび方を自分で考えることができる」などの就学後の学びにつながる目標に対する態度に関する項目については、確かめたり集中して取り組んだりできる環境を整えるという回答が保育者、保護者ともに多かった。また、保護者は、自分で考えて遊べるような玩具を選択するようになっているという回答が多かった。

全体的にみると、人間関係や目標に対する態度に関する項目に関しては、保育者に比べて保護者の取り組みは少なく、保護者は、自然に身につけていく、保育現場における集団生活で学んでいくと考えている様子がうかがえた。この結果については発達心理学会でポスター発表を行った（ポスター添付あり）

これらの分析結果をふまえ、家庭における親子のやり取りを縦断的に観察分析することを通して、保護者が意識していないが、非認知能力の育成に資する親の働きかけの特徴について検討することとした。現在データの分析中であり、H30年度の発達心理学会等で結果を公表する予定である。

3. 研究成果の公表実績・予定（年月日、方法）

平成 29 年 10 月 第 59 回 日本教育心理学会にてポスター発表

大宮明子・石田有理「社会情動的スキルの育成に対する保育者の意識」

平成 30 年 3 月 第 29 回 日本発達心理学会にてポスター発表

石田有理・大宮明子「社会情動的スキル育成のための保育者の取り組みに関する検討」

平成 31 年 3 月 第 30 回日本発達心理学会にてポスター発表予定